

「必要なものはわずかです」

ルカ 10:38-42

【1】喜びはどこへ？

今日の箇所は、私たちにとって本当に必要なことは何かを教えている。この箇所には対象的な姉妹が記されている。この姉妹はイエスと親しくしていた姉妹であった。姉はマルタ、妹はマリアである。姉のマルタは、イエスが自分の村に来たことを知ると、喜んでイエスを家に迎え入れた。一方、妹のマリアは、イエスの足もとに座り込み、イエスの話を聞き入っていた。この様子はまるで詩篇 23 篇に記されている羊のようである。

マルタは大切な客人をもてなそうと忙しくしていた。彼女は心が落ち着かず、あちらこちらに注意が行っていたのである。ところが、妹のマリアの様子を見たとき彼女の心は騒ぎ始めたのである。彼女はついにイエスに対して抗議をはじめた (40 節)。マルタは初めは大喜びでイエスを迎えたのであるが、せわしなく働いているうちにこの喜びを失ってしまっていたのである。何が大切なことであったのかを見失っていたのである。彼女は、自分と妹を比較し、イエスご自身を見失ったのである。イエスを見失うことこそが人の暗さ、罪である。

【2】イエスの眼差し

マルタの抗議に対してイエスは愛の眼差しをもって応えられた。マルタが支配されていた心の暗さを指摘した。「あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。」(41)と。マルタは確かにイエスを歓迎し、イエスに何が出来るのかを考え一生懸命に働いていた。しかし、大切なこと、最も必

要なことを忘れてしまい、マリアに心奪われ、不満をいだいたのである。その結果、イエスご自身への愛を失ってしまったのである。その大切な愛を思い出すようにイエスはマルタに語られたのである。

「マルタ、マルタ」と二度もその名前が呼ばれていることにイエスの愛を見ることが出来る。イエスはマルタの存在に関心を持っていた。イエスが求めておられたのはもてなしではなく、マルタ自身であったのである。このイエスの眼差しにマルタは応答すべきであった。実のところ、この一連の出来事の中にはマリアではなくマルタがいることがわかる。イエスはこのマルタに大切なことを教えようとして彼女たちの家に留まったのであろう。

【3】必要なことは一つだけ

マルタに対してイエスは大切な真理を宣言された。「必要なことは一つだけです。」(42)と。私たちにとってもどうしても必要なことは何であろうか。それは、安心してイエスのもとに存在することである。私たちの様々な働きは決して不要なことではない。しかし、私たちにとって本質的なことではないのである。このような物事の以前に、私たちの命、私たちの存在そのものにとって必要なことは一つだけなのである。神の御前に自分の存在を置くということである。イエスは、ご自身がこの世にこられた目的を語られた。それは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるため (ルカ 5:32) である。

マリアはこのとき、良い方を選んだのである。この良いことは何者によっても、決して取り上げられることはないのである。